

追御尋ねを受けて居りますが、一々御答するに違がないので、御返事も差上げませなんだ處が、種々誤解を生じたり邪推をなさる方もある様な風聞だから、今日は一括して御話致しませう。また御喜びの御縁ともなれば幸である。

先香月院師の御説では、本とは第十八願、末とは成就の文とする義である。この義に就いて、一文不知の愚鈍の者が、第十八願や成就の文の講釋を聞かねば、信は得られぬかとの御尋ねがあつたが、それは文々句々の講釋を聞くには及ばぬ、本願成就の御意さへ頂けば宜敷いのである。『御文』を以て此義を申し上げますと、三帖目第二通に「造惡不善の衆生をほとけになさすは、我も正覺ならじと、ちかごとをたてまして（本）、その願すでに成就して、阿彌陀とならせたまへるほとけなり（末）」。

四帖目八ヶ條の『御文』に、「阿彌陀佛のむかし法藏比丘たりしとき、衆生佛にならずば、われも正覺ならじとちかひましますとき（本）、その正覺すでに成じたまひすがたこそ、いまの南無阿彌陀佛なり（末）、とこゝろうべし」。五帖

目四通に、「諸佛にすぐれて、十惡五逆の罪人を、我たすけんといふ大願ををこしまし〜て（本）、阿彌陀佛となり給へり（末）、この佛をふかくたのみて、一念御たすけ候へと申さん衆生を、我たすけずば、正覺ならじとちかひます彌陀なれば（本）、我等が極樂に往生せん事は、更にうたがひなし」。

是等の御教化から頂けば、造惡不善の衆生をたすけずば正覺ならじとは第十八願のこゝろで本である。正覺を成じたまひて、衆生をたすけたまふは末である。此御意をよく聞き分けたのが、本末を聞いて疑ひのないのである。何も一々經文の講釋は聞かずとも、其御こゝろが頂かれたのが、佛願の生起本末を聞いて疑ふこゝろのないとの仰せに叶うてあります。

五次に圓乘院講師の説では、第十八願を本とし、十九、二十の願を末とすと云ふ義である。此義は三願の差別の上で、本末をたてられたのである。

阿彌陀如來は、凡聖逆謗齊しく我名を稱へよ、かならず救ふとの御本願なれど

も、十方衆生の中に、直入の機と回心の機とがあつて、直に第十八願に歸入しかねる機のために、十九、二十の二願を起したまふたのは末であります。依つて第十八願を弘願と名付け、十九を要門、二十を眞門と申します。此要門と眞門とは、逐機の願と云うて、第十八願へ引き入れる爲の本願であるから、末である。この意を『御和讃』で頂けば「釋迦は要門ひらきつゝ、定散諸機をこしらへて、正雜二行方便し、ひとへに專修をすゝめしむ。」とは、十九の願のこゝろで「定散自力の稱名は、果遂のちかひに歸してこそ、おしへざれども自然に、眞如の門に轉入する」。これは二十の願のこゝろである。此二首の御和讃から頂いて見ると、十九の願と二十の願は、第十八願の眞實へ引き入れる爲の方便の願であつて、末である。

漁師が鯛をとるに、大目の網より中目の網へ追込んで、中目の網より小目の網へ追込んでゆくごとく、諸善萬行を回向するものも、敢てかまはぬと御見捨てな

さると縁が切れる故、臨終に化佛の迎ひを遣るぞと誓はせられて、それより段々と弘願他力へ引込みたまふ思召である。又念佛を多く申して佛に參らせて、それで助けて頂かふと思ふは二十の願、眞門自力の機である。御和讃に「至心回向欲生と十方衆生を方便し、名號の眞門ひらきてぞ、不果遂者と願じける。定散自力の稱名は、果遂のちかひに歸してこそ、おしへざれども自然に、眞如の門に轉入する。」と御示しあらせられてある。

同じ念佛を稱ふるについても、十九の願の機は易行なることを尊んで、名號の諸行に勝ることを知らぬ故、念佛諸行を並べ修して、雜行をすてぬものは要門である。終るところはたすかるものになりにかゝるのである。

又二十の願の機は、名號は諸行に勝れたることを知つて、雜行はすてたれども、名號の不思議力を以てたすけ給ふことを知らずに、自力稱名の功を募つて、往生を願求するものは、眞門自力の行者故、他力廻向を知らずして、本願の嘉號

を以て己が善根と心得、念佛を多く申してそれを佛に參らせて、たすけて貰はうと思ふ自力回向の念佛である。

第十八願他力の機は、彌陀の大悲大願の不思議力にたすけられて、往生を遂ぐるなりと信じて、信の一念に往生一定と安心して、佛恩報謝の爲に念佛するのである。

斯く聽聞して見れば、第十八願は眞實で、これが本で、この第十八願へ入りかねる者を、眞實へ引き入れる爲の十九、二十の願であるから、この十九、二十の願は末である。

時に、斯様に三願の差別を心得分けねばならぬと申しては、むつかしいことの様であるが、約めて申せば。善機になつてたすかりたいと思ふは十九の願の機、念佛申してたすけて頂かうとかゝるは二十の願の機で、十八願の機は、善を役に立てる思ひもなく、又惡を邪魔にする心もなく、我身は惡き徒者、地獄ならで

は趣おもむくべき方かたもなき身みなるを、たすけたまふは彌陀願力みだをりきの不思議ふしぎと信しんじて、己おのれの方ほうでたすかる思案しあんをすて、たすけての阿彌陀如來あみだにょらいをたのみ奉たてまつり、たのむ一念ねんに往生わうじやう一定ぎょうと安心あんしんして、御おんたすけありつることの嬉うれしや、御おんたすけあらうすることの有難ありがたやと、報謝ほうしゃの稱名相續しやうみやうじやうぞくする様やうになつたのが、第十八願だいいちじゅうはちの機きの相まで、これが本末ほんまつを聞きいたといふものである。

『御文おふみ』の上うへで申まをせば、一帖目てふめの初通しよつうに、「正雜しやうざふの分別ぶんべつをきゝわけ、一向一心かうしんになりて、信心決定しんじんけつぎやうのうへに、佛恩報盡ぶつおんほうじんのために念佛ねんぶつまうすこゝろは、おほきに各別かくべつなり」と仰あふせられて、正せいとは第十八願だいいちじゅうはちで本ほんであつて、雜ざとは十九の願がんで末まつである。正雜しやうざふの分別ぶんべつを聞き分わけたのが、本願ほんがんの本末ほんまつを聞きいたのと同じことである。三願さんがんの差別さべつを心こころにおいてのたまふので、昔むかしは雜行正行ざふぎやうしやうぎやうの分別ぶんべつもなく、とは、十八、十九の二願ふたがんの本末ほんまつを知らしらないことで、念佛ねんぶつだにも申まをせば、往生わうじやうするどばかり思おもひつるこゝろなりとは、二十の願ふたご、そこで、正雜しやうざふの分別ぶんべつをきゝ分け、一向一心かうしんになつ

て念佛ねんぶつまうすころとは、第十八願だいじゅうはちがんである。蓮如上人れんにょしやうにんは、むつかしいことも言葉ことば少なすくにやはらげて、一文不知もんふちゆうの者ものが、しらすくの中うちに理りにかなふ様に教をしへられたのである。其正雜そのしやうざふの分別ぶんべつを聞いて、雜行ざふぎやうをすて、正行しやうぎやうに歸きすると云ふは、二帖てふ目の『御文』おふみに、「たゞもろく、の雜行ざふぎやうをすて、正行しやうぎやうに歸きするをもて、本意ほんいとす。その正行しやうぎやうに歸きするといふはなにのやうもなく、彌陀如來みだにょらいを一心しん一向かうに、たのみたてまつる理ことわりばかりなり。」と、然しかれば雜行ざふぎやうすて、正行しやうぎやうに歸きする相または、何なんの様やうもなくほかへ心こころをちらさず、彌陀みだ一佛ぶつに心こころが向むかうて、たすけたまへとたのまれたのが、正雜しやうざふの分別ぶんべつを聞き分けられた相また、これすなはち本願ほんがんの本末ほんまつの聞きえたのである。言葉換ことばかへたら己おのが小善せうぜんをも用ように立たてず、稱ごなへた功こうをも目めにつけず、我身わがみは悪わるき徒者いたづらもの、落おちるより外ほかに仕方しかたのない私わたくしを、たすけましますは彌陀みだ一佛ぶつと信しんじ奉たてまつり、たすけたまへと彌陀みだをたのむ一念ねんの信心決定しんじんけつぎぎの出來たのが、佛願ぶつがんの本末ほんまつの聞きえたのであると云ふが、圓乘院講師えんじやういんかうしの御説おせつである。

第六席 行體と行相

行體と
行相と

一 時に其名號を聞くといふは、名號の謂を聞くのであつて、其謂とは、『行卷』の御指南に基けば、行體と行相との二の謂がある。行相の謂とは稱ふる者を極樂へ迎へんとしたまへる乃至十念の方、行體の謂とは、たのむものを必ずたすくるといふ三信の方で、共に本願名號の謂である。

二つ一緒に申しては混同します故、先稱ふる者とある方の筋合から述べませう。是は源第十八願の乃至十念の願意にして、諸の雜行を選び捨て、念佛の一行を選び取り給ふ選擇攝取の本願で、此本願は果上に至つても御心は變らぬ故、跋陀和菩薩が定中に於いて阿彌陀如來に向つて、「私は彼方の淨土へ往生致し度う存じますが、いかゞ致したならば宜しう御座いますか」と御尋ねなされた處が、阿彌陀如來の御答に、「我國に來生せんと欲はん者は、當に我名を念すべ

し」と、御答へなされたとある。依つて『觀經』の下々品には、一生造惡の惡人が、臨終に火車來現の迎ひに驚いて、七顛八倒する處へ善知識が、「汝若念する能はずんば、應に無量壽佛の名を稱ふべし」と勸め給ふとある。念すること能はずんばとは『觀經』は觀念を説かせられたもの故、此場に及んではとても觀念することはなるまいと、今迄説いた觀念をすて、「唯口に南無阿彌陀佛と稱へよ」と勸め給ふ。是が急救常没と申して、出る息あつて入る息のない、至極短命の機までも御洩らしのない御本願の、速疾の大益を顯はし給ふ處である。善導大師は此處を見抜いて、第十八願に加減の文を造らせられた。其御釋文に、「若我成佛せんに、十方衆生名號を稱ふること、下十聲に至るまで、若生れずんば正覺を取らず」と、三信の言葉を略したまふ。是を元祖相承して、「唯往生極樂の爲に南無阿彌陀佛と申せば、疑なく往生するぞと思ひ取つて」と仰せられた。是善導元祖の思召を、祖師聖人は御相承在して、「彌陀の本願とまうすは、名號を稱へんもの

乃至十念の受心

を極樂へ迎へんと誓はせたまひたるを」と仰せられ、是を蓮如上人は、「第十八の念佛往生の誓願」とのたまふ。何と難有いことでは御座いませんか、跋陀和菩薩の様な御方が定に入つて、定中で阿彌陀如來の直説を御聞きなされた爲、行相の御謂を知らせて頂くことが出来たのである。

二 以上は第十八願の、乃至十念の御約束の方を申し述べたのであるが、この御意を云何御受けすればよろしいかと云ふに、先『觀經』の下々品には、如是至心、令聲不絶、具足十念、稱南無阿彌陀佛と説いてある。如是至心とは、まづ心に信受すること、具足十念とは、口に念佛を稱ふること。爰を善導大師は、「當に本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生することを得と知るべし」と、御釋あらせられました。注意すべきは、稱ふべしと云はずして、當に知るべしと受けてある。當に知とは、信せよと云ふころである。本願の方では三信の言葉を略して、稱我名號、下至十聲とあれども、受ける方では當に稱ふると云はずして、信

すべしと勧めたまふ。

此渡しまへと受けまへとを『一枚起請文』では、「たゞ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛とまうせば」とは、所信の方、「疑ひなく往生するぞと思ひとりて」とは能信、「まをすほかに別の仔細さふらはず」とは能行である。此善導元祖の思召を、増さず減らさず簡單に御示し下されたは『末燈鈔』の「彌陀の本願とまうすは、名號を稱へん者を極樂へ迎へんと誓はせたまひたるを、深く信じて稱ふるが目出度きことにて候なり」とある御化導である。又具に御示し下されたは、『歎異鈔』に、「誓願の不思議によりて持ちやすく、稱へやすき名號を案じ出したまひて、此名字を稱へんものを、迎へとらんと御約束あることなれば、先彌陀の大悲大願の不思議に助けられまいらせて生死を出づべしと信じて、念佛の申さるるも如來の御はからひなりと思へば、少しも自のはからひまじはらざるが故に」とちりばかりもよりつかないのである。

たのむ
ものな
助くる

三次に、たのむものをたすくるとある筋あひの御勸めの方を、御取次ぎ致しま
す。是はもと、第十八願の至心信樂欲生我國とある三信を主としての御化導で、
第十八願成就の文の、聞其名號信心歡喜、乃至一念の經文を、天親菩薩の一心歸
命の論文より伺ひ、善導大師の言南無者の御釋に依り、祖師聖人の『信の卷』の
問答の精髓を絞りあげて、百の物を十に縮め、十の物を一に煎じ詰めて、末代愚
鈍の衆生が、合點し易き様に御化導下されたのである。

先第十八願の三信は、欲生は信樂を體とし、信樂は至心を體とし、至心は至徳
の尊號を以て體とすとあるからは、三信を我等に御回向下するとき、南無阿彌
陀佛の一名號に封じ込めての御與へゆる、三信別々に頂くのではない。第十八願
を心得るといふは、南無阿彌陀佛の相を心得るなり聞其名號信心歡喜とあるから
は、南無阿彌陀佛の六字のこゝろを聞いて、信心を得るのである。其信心が三信
即一の信樂で、論主歸命の一心である是が『信卷』の兩番の問答の大體である。

爰こゝの處ところを蓮れん如に上よ人しやうにんは、「第十八だいじゅうはちの願ぐわんに至し心しん信しん樂げう欲よく生じやう我が國こくといへり。これすなはち三信しんとはいへども、たゞ彌陀みだをたのむところの行者ぎやう歸命きみやうの一いっ心しんなり」と仰あふせられてある。

先まづ第十八だいじゅうはち願ぐわんに、至し心しん信しん樂げう欲よく生じやう我が國こくとあるは、我等われらが往生わうじやう淨土じやうどの因いんを御誓おちかひ下くだされたもので、至心ししんとは阿彌陀あみだ如來にの御誠おまことである。信樂しんげうは阿彌陀あみだ如來にの御智慧おちゑである。欲生よくじやう我國がこくと云いふは阿彌陀あみだ如來にの御慈悲おじひである。其その慈悲じひと智慧ちゑと眞實しんじつとを、南無阿彌陀佛なむあみだぶつに封ふうじ込こめて、衆生しゆじやうへ廻向ゑかうしたまふのを、衆生しゆじやうは聞きく一ひとつで受取うけとるのである。「眞實報土しんじつほうどの正因しちういんを、二尊そんのみことにたまはり」て、釋迦彌陀二尊しやかみだそんの勅命ちきめいで與あたへたまふのである。其その勅命ちきめいとは南無阿彌陀佛なむあみだぶつ、南無阿彌陀佛なむあみだぶつとは、われをたのめ、たのむものをかならずすくふべしとの仰あふせである。此この勅命ちきめいの御承おうちけの出來できたのが信心しんじんである。信心しんじんとて六字じふの外ほかにはあるべからずとあつて、たのむものを必ずすくふべしとの仰あふせを、眞受まうけに信しんじたが信心しんじんの體たいで、是これより外ほかには

ない。

兎角説教には混ごどが多いゆる、信心の貰ひ場を見失うて居る人が多い。支那

人の詩に、

盡日春を尋ねて春を見ず

盡日春を尋ねて春を見ず

草鞋踏みあまねし隴頭の雲

歸來還つて梅花の下を過ぐれば

春は枝頭に在りて已に十分

と申して、春が見たい、春が見たいと、朝から晩までかゝつて山の嶺より谷底ま

で足跡だらけになるほど探しても、頓と春が見附からぬ。そこで夕方家に歸り、

隣翁に話したれば、隣翁の曰く、風流人は梅の花の咲いたのを見て春が来たとい

ふと。そこで梅の木を見れば春は枝上に十分來て居るといふ詩のこゝろである。

今もその如く、阿波十の咄しを聞いて泣けたのが信心で有らうか、住蓮安樂の打

ち首の咄しを聞いてぞつとしたのが信心かと、長の年月信心を探して居る人もあるが、信心は左様な處にあるのではない。然らば何處にあるかと尋ねて見ると、南無阿彌陀佛の六字の謂、即ち我をたのめたのむものを必ず救ふべしとの勅命が信心の貫ひ場と見附けられて見ると、幾度も幾度も他力より授けられて居ながら、聞けども聞こえずであつたと氣附かせて頂き、たのむものをたすくるの仰せ一つが、私のたすかる謂であつたと氣附かれて見れば、己わすれて御たすけ候へと、仰せに順ひ、たのむ思ひより外はない。

かく聞き得られて見れば、今日迄は、たのめの御意がなかつたらよからうと小言を申したことが勿體ない。たのめの仰せが困つたものちやと不足に思ふたが御恥かしい。ようこそたのめと御呼びかけ下さいました。たのめの御意がなかつたならば、萬劫たつても見向きもせぬ私を、一度は一度はの御念力から遂に我喚聲を聞かせて、かゝる機までも御たすけ下さるゝは、阿彌陀如來御一佛ぞとこち

らむかせて、親子名乗りをせにやおかぬの御念力で、十劫以來喚び詰めにして下
 されたればこそ、親を疑ひ子を疑ふ疑ひ深い私わたくしが、今日こんにちといふ今日は仰あやせ一つに
 疑うたがひ晴はれて、御おたすけ候まはらへとたのむ一念ねんに、往生わうじやうは佛ぶつの方かたより御お定さだめと安心あんしんし
 て、御恩報謝ごおんほうしゃの稱名相續しょうみやうさうぞくする身みとなつたのが、たのむものをたすくるといふ勅命ちやくめい
 のきこえた身みである。

第七席 六字の三相

正
因
門
正
行
門

一 當流たうりゆうは教行信證けうぎやうしんしやうと次第しだいして、何時いつでも所行しよぎやうを所對しよたいとして、行者ぎやうじやの能信のうしんが起おこる
 といふのが定まりである。其所信そのしよしんの名號みやうがうに、稱さなふる者ものをたすくるといふ正行門しやうぎやうもんの
 謂いはれと、たのむものをたすくるといふ正因門しやういんもんの謂いはれとがある。其中そのうち前席ぜんせきより、たのむ
 ものをたすくるとある方かたを、御取次おとりぎまを申まをす次第しだいである。

蓮れん如に上人じやうじんは、「信心しんじん獲得かくとくすといふは、南無阿彌陀佛なむあみだぶつのすがたをこゝろうるなり」

と仰せられる。この南無阿彌陀佛のすがたといふは、八十通の『御文』を詳細に伺うて見ると、三通りの相がある。

先一には、南無の二字を機とし、阿彌陀佛の四字を法としての御化導である。この御化導は『行卷』と『銘文』と『和讃』との祖師の御釋を、かみ摧いての御教と頂かれます。『行卷』では、善導大師の言南無者即是歸命とある歸命の二字を分けて、歸の字を能歸に約し、命の字を法に約して、字訓を連ねたまふ。而して終りに、歸命の二字ながら法をに約して、「歸命とは本願招喚の勅命なり」と仰せられてある、この處は一寸聞いても分らぬ處である。元來天竺の南無は、唐の歸命なれば、衆生の方より彌陀をたのみ能歸の方である。夫を「本願招喚の勅命なり」と仰せられては、合點のゆかぬ處である。是は心を靜めてよく伺うて見れば、『行卷』は、所信の行を明かにさせらるゝ卷ゆるゑ、南無阿彌陀佛の六字を、ことごとく法に約して明かにしたまふ。そこで、言南無者の御釋を、残らず本願の謂

になさる。發願回向ほつぷんえかうといふも、「如來にょらいすでに發願ほつぷんして、衆生しゆじやうの行ぎやうを廻施えせしたまふころ」とし、阿彌陀佛あみだぶつ即是すくぜ其行ごぎやうといふも、「選擇せんぎやく本願ほんぐわんこれなり」とのたまふ。故ゆゑに歸命きみやうの二字じも、本願ほんぐわんの勅命ちやくめいとしたまふのである。

時ときに歸命きみやうの二字じが、皆本願みなほんぐわんの勅命ちやくめいとなるは、如何いかなる譯わけぞといふに、是これは歸命きみやうの字じはもと、行者ぎやうじやの能歸のうきなれども、如來にょらいの本願ほんぐわんの方ほうから、我わが本願ほんぐわんに歸きせよ、我われをたのめよと、よびかけたまふことなれば、歸きの字じまでが本願ほんぐわんの勅命ちやくめいとなる。其上そのうへに又歸またきの字じは、行者ぎやうじや能歸のうきのたのむ一念ねんの信心しんじんである。其行者そのぎやうじやの一念ねんの信心しんじんは、もと如來にょらい選擇せんぎやくの願心ぐわんしんより起おこる信心しんじんなりといふことを顯あはしたまふのである。決けつして行者ぎやうじやの自力じりきの信心しんじんではない、全く願力ぐわんりきえ回向かうの信心しんじん故ゆゑ、能歸のうきの信心しんじんまでを如來にょらいの勅命ちやくめいにして御仕舞おしまひなされたのである。歸きの字じと命みやうの字じを分わけるときは、歸きの字じを能歸のうきとし、命みやうの字じを勅命ちやくめいとなされる。けれども、其行者そのぎやうじやの能歸のうきの信心しんじんまでがもと願力ぐわんりきえ回向かうの信心しんじん故ゆゑ、我われに歸きせよ、我われをたのめよの呼聲よびこゑから起おこつたものであるから、本ほんへ

谷のこ
だまは
峯のよ
び聲

約やくしていふときは、皆みな本願招喚ほんがんせうくわんの勅命ちやくめいなりとのたまふである。これが法ほふに約やくしての祖師そし聖人しやうじんの御意おごころである。

二 これを諭たごへて申まをすと、谷たにのこだまは峯みねのよび聲こゑの谷たにへこたへたのである。我われがたすけたまへと阿彌陀如來あみだにょらいをたのむは、全く我われが出来でき心こころではない。我われをたのめ、たのむ者ものを必ずたすくるといふ本願招喚ほんがんせうくわんの勅命ちやくめいから起おこつたのであるから、歸き命みやうの二字じまでを、皆みな勅命ちやくめいとなされたのである。

時ときにこの處ところを法體ほつたい募ぼりの者ものは取違とりちがへて、行者ぎやうじやの能歸のうきを拂はらうて仕舞しまふ。勅命ちやくめいが歸き命みやうであるから、行者ぎやうじやの方かたでたのむとか、信しんずるとか云いふのは、皆みな自力じりきの添そへものであると嫌きらふ。是これは大だいなる誤あやりである。峯みねの呼聲よびこゑで、呼よぶばかりで、谷底たにぞこへ聲こゑが響ひびかすば、こだまとはいはれぬ。谷底たにぞこへ聲こゑがこたへてこそ、谷たにのこだまといふ。何程なにほど呼よんでも、谷底たにぞこへひやかすば、こだまではない、如何いかほど阿彌陀如來あみだにょらいが、大だい音宣布おんせんぷ、響流きやうりゅう十方じふぱうと御喚掛およびかけ下くだされても、行者ぎやうじやの心底こころぞこへ届とどくまいなら、能信のうしんとは

いはれぬ。但し、行者の心は間に合はぬと云うてのけて仕舞うて、如來の御心ばかりでたのんで頂くのではない。凡夫の心を除けて、佛智ばかりで彌陀をたのむのではない。依つて、二帖目第九通の『御文』に「佛心と凡心と一體になるところをさして信心獲得の行者とはいふなり」と仰せられ、第十通には「すでに行者のわろきころを、如來のよき御ころと同じものになしたまふなり」と仰せられてある。佛心といふは、如來のまこところ、即ち他力で、凡心といふは、凡夫善惡の持前の自力の心である。この凡夫自力の惡きころを、如來の他力のよき御心と同じものになし下され、佛心と凡心と一つになつた處が、彌陀に歸命するたすけたまへの一念である。然れば機の方からいへば、彌陀智願の廣海に、凡夫善惡の心水も歸入しぬればすなはちに、大悲心とを轉ずなる。機の方は、凡夫善惡の心水のまゝで本願海に入る。夫を法の方からいへば、彌陀の智願海水に、他力の信水いりぬれば、眞實報土のならひにて、煩惱菩提一味なり。機の方では、